

## 12月の行事予定

11日 都知事表敬訪問

18日 7協理事会

31日 休市

## うおいちの12月の商品情報をホーム

ページに掲載しています。【東京魚市場買  
参協同組合】で検索して下さい。

## 12月組合の異動

12月1日組合員総数260社

12日東水工 事業停止

12月末日組合員総数259社予定

## 【さかなの動き】冷凍アカウオ 米国産輸入量が

半減 1～10月 中国に再び買い負け 12月11日みなと新聞

冷凍輸入アカウオは今年、主力の米国産が中国需要で高騰し、買い負けた。1～10月の貿易統計によると、前年同期比33%減の8488トン、うち米国産53%減の3881トンと落ち込んだ。輸入総量は2012～18年に2万3000～3万1000トンで推移し、19年は2万トン弱に急落。魚価高による需要減が指摘された。20～21年はコロナ禍で値下がり（21年平均キロ272円）し、2万トン水準へ回復した。22年以降は安値の揺り戻し、操業コスト高、円安などにより値上がりで減少が始まった。さらに25年は10月末現在、同488円、米国産422円となっている。中国の買いは23年に下火だったが、24年に例年並みとなり、25年は急上昇した。世界的に加工向けが多獲性魚種が値上がる中、加工場の遊休化を嫌った同国内の購買意欲が高まった。米国産の日本への輸入量は近年、年1万トン前後。25年の漁獲枠は昨年から減っていないが、「肌感では輸入が半減してもおかしくない」（商社筋）。実際、10月末時点では前年同期の半減以下で品薄感が強まる。米国アラスカ産ドレス400／500グラムサイズ内販キロ単価は8月まで430円程度で3年ほど横ばいだったが、以降は500～490円ほどに上がった。

家計支出調査10月 魚介類は実質減に逆戻り  
ブリ、ホタテ、カツオ不振 12月12日水経新聞

総務省は5日、家計支出（家計調査報告、2人以上の世帯）の2025年10月分を発表した。消費支出全体は実質（消費者物価指数で補正して比較）前年比3・0%減と6か月ぶりの減少だった。交通・通信、住居などが1割近く減ったのが響いた。

(右欄上に続きます)

食料は酒類、飲料などが全体を押し下げて、5か月連続の実質減。魚介類は再び実質減に逆戻りした。魚介類の支出金額は5886円で実質4・8%減（名目0・2%減）となった。名目もマイナスとなるのは、2月（2・2%減）以来。ハマチ含むブリ、ホタテ、カツオなどの低迷が響いた形となった。内訳は生鮮魚介類が3211円で実質3・6%減、名目0・8%増、塩干魚介類が1065円で実質8・1%減、名目1・0%減、魚肉ねり製品が実質3・0%減、名目1・5%増、他の魚介加工品が実質6・1%減、名目3・8%減となった。生鮮魚介類と魚肉ねり製品は名目でのプラスを辛うじて継続した。生鮮魚介類のうち支出金額が50円以上で、名目増減（以下のカッコ内はいずれも名目増減）で減少幅が大きかったのは、ハマチ含むブリ（15・7%減）、カツオ（14・7%減）、刺身盛り合わせ（6・9%減）だった。50円未満は、ホタテ（43・3%減）、カニ（28・0%減）の落ち込みが目立った。一方、支出金額が50円以上ある中で増加が大きかったのは、サンマ（23・5%増）、アジ（7・8%増）、サケ（6・2%増）、イカ（5・2%増）だった。

**干アジ・シラス干減** 塩干魚介類の名目の増減は干アジ（15・6%減）、シラス干（12・3%減）が苦戦。塩サケ（13・2%増）は伸びた。魚肉ねり製品は揚げカマボコが健闘している。他の魚介加工品は軒並み名目減だった。

## クロマグロ入荷量最多

豊洲11月国内生鮮大物

12月11日みなと新聞

時事通信社が集計した東京・豊洲市場11月の生鮮大物売り場、国内物の入荷本数は2739本と前年同月比で6・2%増加した。クロマグロの天然物が増えたが、メバチと養殖マグロは前年を下回った。

(次ページ左欄上に続きます)

クロマグロ全体の入荷本数は前年同月比20・6%増の2322本。11月としては異例の2000本超えで、記録が残る過去30年間で最多だった。このうち、天然物は2195本と27・8%の増加だった。延縄、釣物を主体とする青森産が急増したことが主な要因で、大間や小泊、三厩などを主体に、同産は771本（前年同月334本）と大幅に増加した。上旬まで、北海道の厚岸や広尾に水揚げしていた延縄船が「中旬以降に水揚げ地を青森・八戸港にシフトした」（卸会社）ことなども増加要因となった。北海道産も、噴火湾の定置網物を主体に厚岸、戸井、広尾、松前産の延縄物、吉岡の釣物などの水揚げが好調だったため、436本（同250本）と約1・7倍に増加。一方、塩釜などの宮城産は124本（同145本）と減少。ロインやブロックなど、現地で加工された生鮮品の増加なども影響しているという。この他の産地は、千葉・銚子産が35本（同1本）、秋田産が31本（同3本）、岩手産が10本（同10本）あった。以上、延縄、釣、定置物の合計は1422本（同789本）で、80・2%増えた。巻網物は、主産地だった塩釜産の水揚げ減少を受けて、773本（同921本）と16・1%減少した。内訳は塩釜産が765本（同921本）の他、イワシと混獲された銚子産が200キロ前後の特大サイズ主体に8本（同なし）あった。サイズ別のセリ値（発表値の平均）は、巻網物以外の大型（100キロ以上）がキロ6061円で16・3%安、中型（100キロ未満40キロ以上）が同4216円で14・5%安、小型（40キロ未満）は2702円と22・4%安だった。小型は青森、北海道産の潤沢入荷から全体では下げたが、身質評価の高かった厚岸産などには5000円以上が付くケースもあった。月間の最高値は15日入荷の八戸産延縄物（163・8キロ）で、1万5500円だった。巻網物は、大型が3152円と5・7%高、中型が2954円と1・2%高、小型は2600円（前年なし）だった。

(右欄上に続きます)

塩釜産は操業海域が三陸沖より水温の低い道東海域で、「脂のりが良好」（仲卸）と高評価だったため、豊富な延縄物との競合場面でも値下がりするケースは少なかった。養殖クロマグロのセリ場売りは127本（前年同月209本）と39・2%減少した。産地別の内訳は、主力の長崎産が88本（同128本）、高知産が4本（同34本）と定番産地が軒並み前年を下回った。一方、奄美を除く鹿児島産は23本（同8本）、三重産が9本（同8本）と増加した。この他、前年は10本あった京都・伊根産のセリ場売りはなかった。セリ値は発表されなかったが、実勢取引価格は70キロ以上がキロ3600～3400円、50キロ以上が3400～3300円、40キロ以下は3100円前後のもよう。

**メバチ4割減、主産地が不振** メバチ全体の入荷本数は347本（同588本）と41%減少。銚子産が154本（同319本）、塩釜産が62本（同161本）、千葉・房州勝浦産が32本（同68本）と、延縄船の主力産地が軒並み大幅減となった。この他、小笠原産が37本（同、31本）、和歌山・那智勝浦産が38本（同3本）と、他産地もまとまらなかった。減少を受けて、発表されたセリ値の平均はキロ2386円と17・9%高だった。キハダ全体の入荷本数は70本（同65本）とほぼ前年並み。主力は茨城・波崎産で28本（同24本）。この他、那智勝浦産が11本（同2本）、八丈島産が7本（同なし）、神津島産が6本（同18本）、千葉・館山産が4本（同なし）、三宅島産が3本（同）あった。巻網物は、銚子産が7本（同）入荷した。発表されたセリ値の平均は、巻網物がキロ1425円と高評価だった他、巻網以外も1421円と3・5%高だった。（時事）

マグロ情報 豊洲11月 冷メバチ半年で2割高  
原魚不足で上場絞られ

12月15日水経新聞

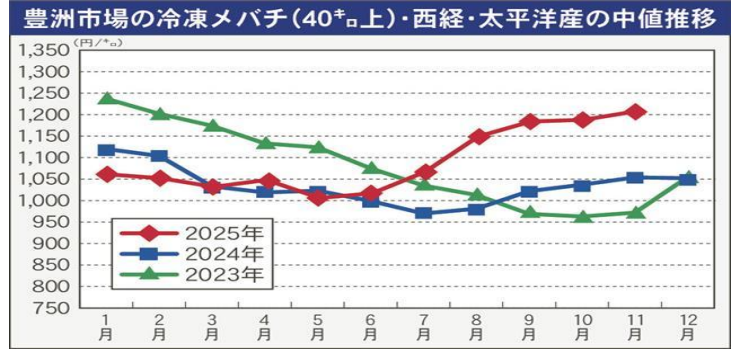
豊洲市場における11月の冷凍大バチ（40キロ上）上場本数は、1万本を大きく割り込み9150本となった。

(次ページ左欄上に続きます)

営業日数が同じ昨年同月の1万4479本から37%もの大幅減少だ。世界的に遠洋マグロはえ縄船の稼働隻数が縮小し、生産量が減る中で、年末商戦も含めこの先を見越した原魚の確保が熱を帯びており、消費地市場での上場本数は一気に絞られた。（グラフ参照）冷バチ西経・太平洋銘柄の公表値キロ当たり中値は1209円（前年比15%高）だった。5月の1007円からわずか半年で2割（202円）もの上昇だ。昨年の今頃は、満庫の冷蔵庫に養殖クロマグロフィレーの新物を入れる庫腹を確保するため、量販店では価格を抑えた特売品をラインアップ。十分な露出があった環境から一転、相場が上がるにつれてチラシの登場機会も減っている。少しでも安い刺身用の冷凍赤身が求められているのだが、公表値中値は冷キハダ1092円（43%高）、冷中バチ1025円（40%高）まで上昇しており、開拓され尽くした感がある。大バチのスノ物も底上げが顕著になってきた。東沖のカツオが不漁だったことも、赤身相場を上げる要因になっている。円安が止まらず、国際的に減船あるいはその計画が進む中、赤身商材の消費は幸いにもまだ日本が主戦場だ。ただ今後、遠洋マグロはえ縄船の生産物が増える要素は極めて少ない。だからこそ、生産コストを反映した販売展開が不可欠になる。脂物も同じことがいえる。赤身相場がここまで上昇した結果、海の荒れる北大西洋や南極海付近での操業を抑え、熱帯域でメバチやキハダを積極的に獲る選択肢も現実味を帯びてきたためだ。

**まき網クロ減少も高評価** 生鮮は国産天然クロマグロが2195本で、前年同月を28%も上回った。宮城・塩釜を中心としたまき網物は773本（16%減）まで減少したが、はえ縄・釣り物を主体とする青森産が前年同月比2・3倍の771本へと急増している。だがキロ当たりセリ値（発表値の平均）は、まき網物で大型（100キロ以上）が3152円（5・7%高）を付けた。水温の低い道東海域の漁獲物に評価が高い。まき網以外の大型は6061円（16%安）だった。

（右欄上に続きます）



### 養殖クロマグロ入荷大幅減 豊洲11月輸入 生鮮大物 メキシコ大規模へい死影響 12月15日みなと新聞

時事通信社が集計した東京・豊洲市場11月の生鮮大物売り場、輸入物の入荷本数は160本で、前年同月（211本）から24・2%減少した。天然ミナミマグロとメバチは前年を上回ったが、天然クロマグロは減少した。クロマグロ全体の本数は77本（前年同月157本）とほぼ半減。天然物では主力のカナダ産が43本（同73本）に減少した他、前年から入荷が続いているノルウェー産延縄物も16本（同45本）とまとまらなかった。ギリシャなど地中海産の入荷は3年連続で入荷がなかった。オセアニア方面からはオーストラリア産が11本（同1本）あった。養殖物ではメキシコ産が7本（同38本）に減少した。カナダ産の減少は、しけの長期化や円安などの為替要因に加え、競合する宮城・塩釜産巻網物の順調な出回りも大きく影響したもよう。ノルウェー産もしけの影響から上場したのはわずか3日間だけだった。セリでは、カナダ産の高値はキロ7700円（同5600円）、平均値は5560円（同4569円）に上伸した。需要が高まる連休明けに入荷したことや、扱いやすい100キロ弱の大中型の割合が高かったことが好感され、相場は上向いた。一方、ノルウェー産は身質評価こそ悪くなかったが、カナダ産や国内巻網物に押され、16本全数が不成立に終わった。養殖物のメキシコ産は全数がセリ値未発表。人気のない30キロ前後の小型のみだったことで、見送られたもよう。大幅に減った要因は、夏に発生した大規模なへい死で、

（次ページ左欄上に続きます）



「養殖場によっては、日本向けに出荷できる50キロ以上のサイズがほぼ全滅した」（卸会社）とされ、最需要期である年末を前に、現地の出荷体制が大きく揺らぐこととなった。ミナミマグロの天然物は豪州産が56本（同32本）あった。漁場は前年に引き続きタスマニア海域で、盛漁期の上品に匹敵する良品も含まれ、身色、脂のりともに良好だった。セリでは、高値はキロ5000円（同3300円）、平均値は2940円（同2388円）と昨年を上回ったが、すでに「顧客の需要が生鮮ミナミマグロから離れている」（仲卸業者）時期であることから、セリで複数社が競合する場面はごく限定的だった。メバチは27本（同14本）に増加。豪州産が14本（同14本）とマーシャル産が13本（同入荷なし）あった。豪州産はセリの成立が1本のみでキロ2000円。マーシャル産もセリ残りが多く、平均値は1250円と安値圏だった。（時事）

ねり10月支出1%増759円

家計調査

12月15日みなと新聞

総務省が発表した10月のねり製品1世帯当たりの家計支出は、前年同月比1%増の759円だった。プラスは2カ月連続。揚げかまぼこが8%増の239円と、品目別で最も伸びた。5カ月連続のプラスで、伸び率は2月の12%に次いで高かった。ちくわは1%増の183円だった。一方、かまぼこは2%減の200円だった。2カ月に前年同月を下回った。「他の魚肉ねり製品」も2%減の137円に減少した。マイナスとなったのは今年に入って初めて。

【さかなの動き】上乾チリメン 大阪本場

卸値保合い3500円 気温下がり需要減 12月17日みなと新聞

大阪市中央卸売市場本場（大阪本場）における12月中旬の上乾チリメンの中心卸値はキロ3500円。品質は11月から上向いたものの、気温の低下などによって需要が下がり、中心相場は前月中旬比保合いで推移した。

（右欄上に続きます）

シラスの水揚げ産地は愛知と兵庫、大阪が多く、静岡と徳島、福島、茨城、愛媛などの水揚量が散発的で少ない。入荷産地は愛知、兵庫など。魚種はカタクチで、2～3センチサイズ中筋から中小筋。体色は白色。同市場の仲卸は在庫をあるかどうか思案しながら買い付ける。スーパーは、年末商材の品ぞろえに力を入れており、上乾チリメンの売り場は狭くなり、売れ行きは鈍い。一方、創作チリメンなどの加工業者、ホテル、飲食店などの業務筋の引き合いは依然として強い。今後の相場は保合いの見通し。卸担当者は「12月25日で今年の漁を終える地域があり、今後の取り扱い増を見込めない」と話す。「1月からは高知の水揚げが増えることを期待している」と続けた。釜揚げシラスの中心相場は前月中旬比160～260円安のキロ1400～1300円。愛知産が中心。品質は良いものの、入荷量が増え、値を下げた。

おせち料理、約7割が「食べた」紀文食品

2026年紀文・お正月百科で発表 12月18日水経新聞

（株）紀文食品はこのほど「2026年紀文・お正月百科」を発表した。恒例の「紀文・お正月全国調査2025」では、今年1月に全国47都道府県の20～69歳の既婚女性7015人を対象にした調査結果を公表。25年の正月におせち料理を食べた人は全体の66・3%となり、年代が上がるにつれて喫食率も上がった。自宅でのおせち料理の用意率は約5割。「今年初めて用意した」や「久しぶりに用意した」と回答した人が最も多かったのは前年と同様、20代だった。用意したおせち料理の1位はカマボコが獲得した。次いで黒豆、雑煮、カズノコ、伊達巻が続いた。好きなおせち料理の全国1位は雑煮。栗きんとんや黒豆、カズノコが続いた。正月に関する意識については、全体の9割近くが正月を「日本の大切な伝統行事である」と思っているほか、8割以上が正月を「家族で過ごせる大切な時間」であると思っていることも分かった。

（次ページ左欄上に続きます）

冷凍カラスガレイ 内販さらに上昇

需要期も販売落ち込む 12月18日みなと新聞

12月中旬の冷凍カラスガレイの0・5～1キロドレスの内販価格（関西の商社出し値）は、前年同期比約3割高の1600～1550円と2カ月前からさらに上昇している。商社筋は「中国に買い負ける状況が続いている。産地の水揚げが低調で1900円の単価が見えてきている」と説明する。商社筋によると、各産地の水揚げ状況が悪く、高値の状態からドル価がさらに上昇しているという。商社筋は「日本勢は最新の単価で買い付けできておらず、残りの今期に買い付けできる可能性は非常に低だろう」と懸念する。主な販売先の量販店は、需要期となる冬場でも価格の上昇から販売数量は落ち込んでいると商社筋。今後については「中国の買い付け意欲は下がりそうもなく、単価は上昇を続けるだろう」と見通す。貿易統計によると、今年1～10月の冷凍カラスガレイ輸入量は前年同期比18%減の7553トン、キロ平均単価は21%高の1194円。10月は前年同月比45%減の722トンまで落ち込み、単価は35%高の1394円と大幅に上昇している。同月は最多の輸入量を誇るカナダは前年並みの数量を維持したが、ドイツやアイスランド、ノルウェーなど、その他の主要国からの輸入量は前年同月を大幅に下回った。

台湾大バチ保合い1000円 インド洋一船買

不足感も年末出番少なく 12月18日みなと新聞

冷凍メバチ相場の指標となるインド洋台湾船一船買い相場は12月中旬現在、1本40キロ上の大バチは先月と同じキロ1000円で推移する。年内搬入分は「赤身が少ない」と東京・豊洲卸。大バチ相場は1年間で200円上がった。現在は11月中旬～下旬に入港した運搬船が水揚げし、12月中には終わる見通し。赤身商材の不足感は解消していないが、卸は「脂商材が動く時期。赤身は必需品だが、年末商戦で足りないか」と微妙」と話す。

（右欄上に続きます）

12月末の入港は年明け以降に水揚げする見通しだ。大バチ相場は2022年に1150円まで高騰したが、末端の「マグロ離れ」を招き急落。国内超低温冷蔵庫の庫腹不足による水揚げ遅延も重なり、24年8月には750円を記録した。極端な安値は遠洋延縄船の経営に悪影響を及ぼすことから、商社は同年12月に800円へ値上げを実施した。25年は商社の積極的な販促もあり、在庫過多が解消。大バチの一船買い相場は6月850円、7月900円、9月950円と段階的に上昇。10月には現在の価格になった。現在は原料不足で一船買い相場は上げ基調が続く。卸は「これ以上の値上げは末端消費が鈍る恐れがあり、バランスを見極める必要がある」と指摘する。インド洋台湾船一船買い相場のうち、25キロ上は800円、15キロ上は700円、10キロ上は600円。キハダは25キロ上は800円、15キロ上は700円、10キロ上は600円と先月から変わらない。

（次ページ左欄上に続きます）